

A s i a n J o u r n a l o f  
**H U M A N  
S E R V I C E S**

Printed 2012.0430 ISSN2186-3350  
Published by Asian Society of Human Services

*April* 2012  
**VOL. 2**



## ORIGINAL ARTICLE 12

# 小学校通常学級に在籍する発達障害児の ストレスの実態

## The current situation of schoolchildren that seems developmental disorders in general education.

小原 愛子<sup>1)</sup> (Aiko KOHARA) , 森 浩平<sup>2)</sup> (Kohei MORI)  
田中 敦士<sup>3)</sup> (Atsushi TANAKA) , 新城 倫子<sup>4)</sup> (Noriko ARASHIRO)

1) 琉球大学教育学部

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1 琉球大学教育学部特別支援教育研究講座

a1j1\_tokushi@yahoo.co.jp

2) 琉球大学大学院教育学研究科

ktv\_m\_kohei@yahoo.co.jp

3) 琉球大学教育学部

atanaka@edu.u-ryukyu.ac.jp

4) 沖縄県立美咲特別支援学校

### ABSTRACT

本研究では、小学生を対象に発達障害児を含む通常学級における児童らのストレス実態調査を行い、「気になる児童群」と「適応児童群」の比較検討することを目的とする。PSIの結果から、「気になる児童群」は、「適応児童群」と比べ「無力感」を感じていることが明らかになった。また、「気になる児童群」は周囲からのサポートを受けていないと感じていることが示された。心理的介入等のソーシャルサポートによって自己肯定感を高めていくことが児童のストレス緩和につながるであろう。

This purpose is investigating the current situation of stress students that seems developmental disorders in general education. From the result of PSI, it shows that students with developmental disorders feel of helplessness higher than general students. And students with developmental disorders feel that they are not supported by around people. It leads to alleviation of student stress that heightens self-esteem because of social support such as mental intervention.

Received  
February 8, 2012

Accepted  
March 13, 2012

Published  
April 30, 2012

## &lt;Key-words&gt;

発達障害児, メンタルヘルス, ストレス, 特別支援教育  
students that seems developmental disorders, mental health, stress, special needs  
education

Asian J Human Services, 2012, 2:156-165. © 2012 Asian Society of Human Services

## I. 問題と目的

### 1. 児童生徒のストレスに関する研究の動向

平成 22 年度文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」による発表では、小・中・高における暴力行為の件数は 5 万 9 千件と、昨年に比べ減少しているものの、5 年前と比べると増加している。また、いじめの件数は 7 万 5 千件、小・中学校における不登校の児童は 5 万 3 千人と年々増加している傾向にある。この調査により、現代の子ども達を取り巻く教育環境は、かなり厳しくなっているものと容易に推察されよう。

児童生徒における心理的ストレスの研究は、不登校・いじめ・非行等の問題の深刻化を受け、数多くなされてきた。嶋田 (1998) は、児童生徒の示す様々な学校不適應の問題を学校ストレスという観点から検討し、学校不適應の理解の枠組みとその解決の方策を提供しようとする試みを行った。学校ストレスは、ストレスを経験してからストレス反応を生じるまでの間に様々な要因が媒介しているとし、この過程を学校ストレスの経験→認知的評価 (ストレスに対する受け止め方) →コーピング (対処の方法) →ストレス反応の表出として示している。また、そのストレスの過程に影響し、同じストレスであってもストレス反応が高い場合とほとんど出ない場合がある。その要因として個人的要因である知覚されたソーシャルサポート、ソーシャルスキル (社会的スキル) があげられる (坂本, 2007)。ソーシャルサポートとストレス反応との研究では、「高くサポートを期待している児童はストレス反応の得点が低い。」「女子では、友人よりも両親への期待が高い方がストレス反応の得点が低い」という結果も出ている。

ストレス反応が生じるまでの過程にある「ストレス反応」「ストレス」「ソーシャルサポート」についてそれぞれの測定に関する最近の研究の動向を以下に記していく。

#### (1) ストレス反応の測定に関する研究

心の健康状態を測定するための信頼性・妥当性の高いストレス反応尺度は CMI (Cornell Medical Index) や CMI を簡略化した KMI (Kyudai Medical Index: 河野・吾郷, 1990) などがあるが、これらの尺度は一般成人のストレスを測定するためのものであり、子どもにとってはその意味を理解することが難しい。そこで、岡安・嶋田・坂野 (1992) は、中学生のストレス反応を測定するために小学生にも質問内容の意味を容易に捉えることのできる平易な表現の作成を試みた。

因子分析の結果などから、中学生用尺度と同様に小学生のストレス反応を包括的に測定するものとして「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無力感」「身体的反応」の 4 つの下位尺度から構成される小学生用ストレス反応尺度を開発した (坂野・岡安・嶋田, 2007)。

Received  
February 8, 2012

Accepted  
March 13, 2012

Published  
April 30, 2012

### (2) 学校のストレスの測定に関する研究

子どもの学校での生活は大きな比重を占めていると考えられ、子どもにとって学校は慢性的なストレスにさらされる可能性が高い場所であるといえよう。Phillips (1966) は、日常の学校生活に焦点を当てたストレスを包括的に測定する尺度を開発し、子供用テスト不安尺度や達成不安尺度をもとに子供用学校調査票 (CSQ) を作成した (Phillips, 1978)。<sup>1</sup>しかし、この尺度はストレスとストレス反応が明確に区別されておらず、両者が混在する項目が多数存在するという問題点がある。

また、嶋田・岡安・坂野 (1992) も児童用学校ストレス尺度の開発を試みている。男女別の因子分析の結果、男子では「対人関係」「学校システム」「発表場面」「学業達成」「行動規制」の 5 因子、女子では「対人関係」「学校システム」「学業達成」「サポート人物」の 4 因子が得られている。さらに、学校ストレスを高く評価している児童ほど、学習意欲が低いことを報告している。

このように「友人関係」や「学業」といった学校生活において経験することの多いごく日常的な出来事は、ライフイベントとは異なり、長期間持続し、しかも解決することが難しい慢性的なストレスとして、子どもの健康に悪影響を及ぼす可能性が示唆されてきた (坂野・岡安・嶋田, 2007)。

### (3) ストレス緩和要因としてのソーシャルサポートに関する研究

ストレスやストレス反応を測定する尺度の開発から始まった学校におけるストレス研究においても、他の領域のストレス研究と同様に、子どもの心のケアおよび学校不適応の予防に資する要因を明らかにするために、ストレスを緩和するまたは、ストレスを増幅させる個人的要因に焦点を当てた研究が盛んになってきた。ストレスの増減に影響する個人的要因としては、親や仲間からのソーシャルサポートや、対人関係を円滑に形成しそれを維持するために必要とされる技能としてのソーシャルスキル(社会的スキル)などが報告されている。

ストレスに関する要因の中でも、特にストレスを緩和する効果が高い個人的要因として、ソーシャルサポートをあげることができる。Cobb (1976) によると、ソーシャルサポートは (1) 他者からケアされている、愛されていると信じさせるような情報、(2) 他者から尊重され、価値あるものとみられていると信じさせるような情報、(3) 相互に義務を負うようなコミュニケーションネットワークに所属していると信じさせるような情報、と定義されている。

彼は、このような情報は個人の親和動機や自尊心を高めるように作用し、人生における危機や重大な生活上の変化に直面した場合に、自発的なストレス対処行動を促進させ、その結果として心身の健康が維持されるというソーシャルサポートのストレス緩和説を唱えた。

強いストレスあるいは慢性的なストレスにさらされた人ほど心身疾患への罹患率が高いという疫学的証拠は数多く報告されている。しかし、ストレスのみによるストレス反応の説明は、他の要因による影響を完全に排除するほど高くない。強いストレスにさらされていても健康状態を維持している人もいれば、周囲の目からは何でもないようなストレスによって強い抑うつ状態に陥ってしまう人もいる。現在ではストレスはスト

Received  
February 8, 2012

Accepted  
March 13, 2012

Published  
April 30, 2012

<sup>1</sup>Phillips, B (1978) School stress and anxiety. New York : Human Science Press. 筆者は原著未読。本稿の引用は、石津憲一郎 (2006), 中学校のスクール・モラルを支える要因の検討 6, 3-17 4 ページ。

レス反応を説明する十分条件の一つに過ぎないという見解が広く信じられている。

ソーシャルサポートは、ストレス過程において特にコーピング活動を促進し、ストレス者の衝撃を緩和してストレス反応を緩和する効果を持つ要因のひとつとして大きな注目を浴びている。ひとつのモデルとして、従来の考え方に対し、ストレス緩和効果の表れ方の相違はストレス者の強度との関数であるという「曲線的ストレスモデル」が提唱されている (Barrera, 1988)。このモデルによれば、ストレス者レベルが著しく低い場合と高い場合には、ソーシャルサポートの緩和効果は見られず、中程度のストレス者の場合のみにソーシャルサポートの直接的効果が見られる。

## 2. 発達障害児とストレス

平成 19 年に「特殊教育」から「特別支援教育」へと移行し、LD (学習障害)、AD/HD (注意欠陥多動性障害) などの発達障害と呼ばれる子ども達も特別支援教育の対象となった。平成 15 年の文部科学省による「通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の実態」の結果では、LD、AD/HD、高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒は約 6.3%の割合で通常の学級に在籍している可能性があることが明らかになっている。その児童生徒が、現在多忙化している学校の中で友人関係や成績等にストレスを抱えて過ごしていることは容易に推察される。

発達障害児の多くは通常学級に在籍しているが、一見して分かりにくい障害であるために、適切な支援を受ける機会が少なくなっている。周囲の不適切な対応や多くの失敗の経験、自尊感情の低下などから生じる二次的障害の問題が指摘されている (杉原・原, 2003)。また、近年、心身症の児童生徒の中には、発達障害を有している場合の児童生徒もおり、その二次的障害として不登校になったケースがある (咲間, 2010)。このことから、発達障害の児童の学校におけるストレスは大きく、周囲に障害の理解がされにくいことから、ストレスの軽減効果となるソーシャルサポートを受けづらいことが予想される。「軽度発達障害児における学校ストレスとソーシャルサポートに関する研究」(坂本, 2007) では、軽度発達障害児は日常的にストレスを感じ、高いストレス反応を表出し、主に「不機嫌・怒り」や「無気力」として現れていることが明らかになった。

しかし、実際の学校現場では、「学習の顕著な遅れ」、や「友人との頻繁なトラブル」、「不登校」等、気になる面は見られてもなかなか診断されるまでには至らず、適切な支援を受けられずにいる子の方が多いと考えられる。実際どのくらいの児童が「発達障害児」と診断を受け、適切な指導・支援を受けているのであろうか。まだまだ多くの発達障害の子どもたちが通常学級の中でストレスを抱えながら過ごしていることが推測される。

## 3. 目的

本研究では、発達障害児を含む通常学級における児童らの学校ストレスを調査するために、小学生を対象としたストレス反応、学校ストレス、ソーシャルサポート、コーピングの実態調査を行った。なお、発達障害児と明確に診断はされていないものの発達障害の可能性があると考えられる児童も通常学級に多く在籍していることが推測されるため、本研究では診断はされていないが通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童を特に「気になる児童」として、広く検討を行うこととする。学級担任からみた「気になる児童」と、「適応児童」

との比較を行い、その違いについて検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象

公立小学校に在籍する5～6年生（各学年4クラス）合計280名を対象に質問紙調査を行った。また、その中から学級担任に個別に特別な配慮を要する児童として、不登校や学習の顕著な遅れ、友人とのトラブルなど学級担任から見た「気になる児童」を、文部科学省が平成14年に実施した「児童・生徒理解に関するチェックリスト」をもとに抽出してもらい、その他の児童とは別に「気になる児童群」（26名）とした。

### 2. 手続き

2011年10月から11月に各学級担任指導の下において朝の会や授業時間などを用いて同時に集団で実施した。

### 3. 調査内容

測定においては実務教育出版より発行されている「PSI 小学生用・中学生用・高校生用」（坂野・岡安・嶋田, 2007）の中から小学生用の尺度を用いた。

PSI（ピーエスアイ：Public Health Research Foundation Type Stress Inventory）は、その過程で作成してきた子ども用のストレス反応尺度、ストレッサー尺度、ソーシャルサポート尺度を、従来よりもできる限り簡便に利用できるように改良を加え、子どもの心の健康状態を測定する上で、一定の信頼性や妥当性を有する包括的なアセスメントツールとして開発されたものである。

質問紙調査の主な質問項目は以下の通りである。

#### （1）フェイスシート

回答者の基本的属性

- ・ 学校名
- ・ 学年・組・番号
- ・ 性別

フェイスシートでは、回答者の基本的属性として、学年・性別をたずね、それぞれにおいてストレスがメンタルヘルスにどのように関わっているのかを明らかにした。

#### （2）ストレス反応

PSIのストレス反応尺度を用いる。「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無力感」「身体反応」の4つの下位尺度から構成される。12項目から成り、「0. ぜんぜんあてはまらない」「1. あまりあてはまらない」「2. 少しあてはまる」「3. よくあてはまる」の4件法で回答し、下位尺度ごとに、対応する項目の合計得点を算出する。その数値が大きいほど、各下位尺度で現される特性が高いレベルにあることを示している。

### (3) ストレッサー

PSI のストレッサー尺度を用いる。「教師との関係」「友人関係」「学業」の3つの下位尺度から構成されている。ストレス反応と同様、9項目から成り、「0. ぜんぜんあてはまらない」「1. あまりあてはまらない」「2. 少しあてはまる」「3. よくあてはまる」の4件法で回答し、下位尺度ごとに、対応する項目の合計得点を算出する。その数値が大きいほど、下位尺度ごとで表される特性が高いレベルにあることを示している。

### (4) ソーシャルサポート

PSI のソーシャルサポート尺度を用いる。自分がストレス状態にあるときに、周囲の人がどのくらい助けになってくれるかというサポートの入手可能性に関する評価、すなわち知覚されたサポートを測定するための尺度である。サポート源は「父親」「母親」「担任」「友人」の4つであり、いずれも同じ項目で測定される。「0. ちがうと思う」「1. たぶんちがうと思う」「2. たぶんそうだと思う」「3. きっとそうだと思う」の4件法で回答し、得点が高いときは、それぞれの人と円滑な対人関係を形成していることを示すが、逆に、得点が高いときには、それぞれの人と疎遠な関係にあるか、あるいは葛藤状態にあることを示す。

## III. 結果

### 1. フェイスシート

#### (1) 回収率

本研究における調査アンケートの回収率は280名中、有効件数は274名で、回収率は97.9%であった。そのうち、有効件数の274名を対象者とする。

#### (2) 回答者の学年と性別

回答者は、5年生148名、6年生126名で、男女の内訳は男子140名、女子134名であった。

#### (3) 児童群

学級担任から聞き取りをした気になる児童を「気になる児童群」とし、その他の児童を「適応児童群」とした。「気になる児童群」は5年生21名、6年生5名で「適応児童群」は5年生129名、6年生119名であった。また、アスペルガー症候群の診断を受けた児童もいたが、1件しかデータが集まらなかったため「気になる児童群」に含める。

### 2. ストレス反応尺度

児童群の検討を行うために、ストレス反応の各下位尺度得点について「適応児童群」と「気になる児童群」に関して  $t$  検定を行った。その結果、「身体的反応」下位尺度 ( $t(30.3)=-1.28$ )、「抑うつ」下位尺度 ( $t(270)=-1.89$ )、「不機嫌・怒り」下位尺度 ( $t(270)=-1.05$ ) においては有意でなかったが、「無力感」下位尺度 ( $t(270)=-2.56, p<.01$ ) において児童群は1%の水準で有意であった。

ストレス反応尺度については、「無力感」において1%水準で有意な差が認められ、「気

なる児童群」 > 「適応児童群」という結果が得られた。

表 1 児童群別のストレス反応の平均値と SD および *t* 検定の結果

	適応児童群		気になる児童群		<i>t</i> 値	<i>p</i>
	平均	SD	平均	SD		
身体反応	3.15	2.33	3.77	2.37	-1.28	n.s.
抑うつ	1.72	1.98	2.50	2.34	-1.89	n.s.
不機嫌・怒り	2.55	2.44	3.08	2.24	-1.05	n.s.
無力感	1.95	2.02	3.04	2.44	-2.56	**

\*\**p*<.01

### 3. ストレッサー尺度

児童群の検討を行うために、ストレッサーの各下位尺度得点について「適応児童群」と「気になる児童群」に関して *t* 検定を行った。その結果、「教師」下位尺度 ( $t(270)=-3.61, p<.001$ )、「友人」下位尺度 ( $t(270)=-2.28, p<.05$ )、「学業」下位尺度 ( $t(270)=-5.66, p<.001$ ) のいずれにおいても児童群は有意であった。

ストレッサー尺度においては、3 つの下位尺度すべてに有意な差が認められ、「気になる児童群」 > 「適応児童群」という結果が得られた。

表 2 児童群別の平均値と SD および *t* 検定の結果

	適応児童群		気になる児童群		<i>t</i> 値	<i>p</i>
	平均	SD	平均	SD		
教師	0.65	1.38	1.77	2.46	-3.61	**
友人	1.72	2.23	2.81	3.15	-2.28	*
学業	2.08	1.97	4.50	2.86	-5.66	**

\*\**p*<.001 \**p*<.05

### 4. ソーシャルサポート

児童群の検討を行うために、ソーシャルサポートの各下位尺度得点について「適応児童群」と「気になる児童群」に関して *t* 検定を行った。その結果、「父親」下位尺度 ( $t(270)=3.25, p<.01$ )、「母親」下位尺度 ( $t(270)=3.04, p<.01$ )、「先生」下位尺度 ( $t(270)=4.68, p<.001$ )、「友達」 ( $t(270)=2.75, p<.01$ ) のいずれにおいても児童群は有意であった。

ソーシャルサポート尺度においては、4 つの下位尺度すべてに有意な差が認められ、「気になる児童群」 > 「適応児童群」という結果が得られた。

Received  
February 8, 2012

Accepted  
March 13, 2012

Published  
April 30, 2012



表3 児童群別の平均値とSDおよびt検定の結果

	適応児童群		気になる児童群		t値	p
	平均	SD	平均	SD		
父親	4.93	3.27	2.77	3.00	3.25	**
母親	6.70	2.48	5.08	3.54	3.04	**
担任	6.00	2.58	3.50	2.73	4.68	***
友達	6.32	2.49	4.88	3.00	2.75	**

\*\*\*p&lt;.001 \*\*p&lt;.01

## IV. 考察

### 1. ストレス反応について

「気になる児童群」と「適応児童群」の2つのグループとストレス反応下位尺度の関連において、「気になる児童群」は「適応児童群」と比較して「無力感」を感じていることが明らかになった。この結果から、「気になる児童群」は、十分な自己肯定感を得られていないと考えられる。心理的介入等によって自己肯定感を高めていくことが児童のストレス緩和につながるであろう。

### 2. ストレッサー尺度について

「気になる児童群」と「適応児童群」の2つのグループとストレッサー下位尺度の関連において、「気になる児童群」は「適応児童群」と比較して「教師」「友人」「学業」をストレスと感じていることが明らかになった。

「教師」に関しては、日々の授業や宿題、生活態度において注意を受ける場面が多く、「友人」に関しては、嫌なことを言われたり、無視されたりする場面があるからだと考えられる。気になる児童は、学校生活での人間関係にストレスを感じているといえる。また、「学業」に関しては、授業がわからない、テストの結果が悪かった、わからない問題をあてられた等の授業中のストレスを感じているといえる。文部科学省（2007）によると、発達障害の児童生徒に対し学習活動上のサポートを行ったりする「特別支援教育支援員」の活用が、障害に応じた適切な教育を実施する上で一層重要となってきたと述べている。特別支援教育支援員の配置により、個別指導の機会の充実が学習面でのストレス緩和につながるのではないだろうか。

### 3. ソーシャルサポート尺度について

「気になる児童群」と「適応児童群」の2つのグループとソーシャルサポート下位尺度の関連において、「気になる児童群」は「適応児童群」と比較して「父親」「母親」「担任」「友達」からのソーシャルサポートを受けていないと感じていることが明らかになった。

この結果から、児童が精神的な負担を抱えたときに、すぐに気付き励ましてくれる存在が少ないことや、悩みや不安を気軽に話せる場が整っていないと考えられる。そのため、児童がいつでも相談できる環境を整えることや、心理的介入等の児童のストレス緩和につながる方法を模索することが必要であろう。また、教師の介入によりストレスを緩和させることが

できる「ストレスマネジメント教育」の在り方も合わせて検討していくことを今後の課題にしたい。

## 付記

調査に協力くださいました小学校との先生方、子どもたちおよび、情報提供を頂きました研究協力者の皆様方に感謝いたします。

## 文献

- 1) 新城倫子 (2010), 小学校における「気になる子」のメンタルヘルスに関する実証的研究: 琉球大学教育学部特別専攻科 卒業論文
- 2) Barrera, M, Jr. (1988), Models of social support and life stress. In L. H. Cohen (Ed.) Life events and psychological functioning. Newbury Park: 211-236.
- 3) Cobb, S (1976), Social support as a moderator of life stress. Psychosomatic Medicine 38, 300-314
- 4) 石津憲一郎 (2006), 中学校のスクール・モラルを支える要因の検討 6, 3-17
- 5) 小杉正太郎 (2006), ストレスと健康の心理学 朝倉書店
- 6) 河野友信・吾郷晋浩 (1990), ストレス診療ハンドブック メディカル・サイエンス・インターナショナル
- 7) 間正美恵・宮下敏恵 (2009), 小学校高学年におけるストレス軽減効果の検討: チェックリストを活用した不適応傾向児童への二次的援助 日本教育心理学会総会発表論文集(51), 595
- 8) 文部科学省 (2011) 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 9) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2007) 「特別支援教育支援員」を活用するために
- 10) 長根光男 (1991), 学校生活における児童の心理的ストレスの分析: 4, 5, 6, 年生を対象にして 日本教育心理学研究 39(2), 182-185
- 11) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1992), 中学生用ストレス反応尺度の作成の試み 早稲田大学人間科学研究 5(1), 23-29
- 12) Phillips, B. (1978), School stress and anxiety New York: Human Science Press.
- 13) 坂本あすか (2007), 軽度発達障害児における学校ストレスとソーシャルサポートに関する研究 白百合女子大学発達臨床センター紀要 No.10, 61-69
- 14) 坂野雄二・岡安孝弘・嶋田洋徳 (2007), PSI 小学生用・中学生用高校生用マニュアル 実務出版
- 15) 咲間まり子 (2010), 学校不適応児童生徒の現状と課題～病弱特別支援学校の変容を通して～ 岩手県立大学社会福祉学部紀要 No.12, 1-10
- 16) 嶋田洋徳 (1998), 小学生用の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房

Received  
February 8, 2012

Accepted  
March 13, 2012

Published  
April 30, 2012

- 17) 嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二（1992），児童の心理的ストレスと学習意欲との関連 健康心理学研究 5(1), 7-19

Received  
February 8,2012

Accepted  
March 13,2012

Published  
April 30,2012

## CONTENTS

### REVIEW ARTICLE

- A Paradigm Shift in Rehabilitation Medicine:  
From “Adding Life to Years” to “Adding Life to Years and Years to Life” ..... **Masahiro KOHZUKI, et al.** • 1

### ORIGINAL ARTICLES

- Compatibility of Market and Publicness in Community Service  
Innovation Programs of South Korea ..... **Gi-Yong YANG** • 8
- Relation between sports activity experience and individual  
attributes of students with intellectual disabilities in  
high-school special needs education programs ..... **Hideyuki OKUZUMI, et al.** • 21
- A Study on the Relationship between the Community  
Organizing Movement and the Emergence of Social Enterprise in Korea  
- Focused on Relationship with Self-Sufficiency Project - ..... **Moon-Kuk LEE** • 29
- Attitudes toward suicide survivors, perspectives on suicide  
and death among Japanese university students ..... **Akira YAMANAKA** • 38
- Development Process and the Actual Situation of Social Business in Japan ..... **Hong-Gi KIM** • 51
- Psychological Effects of a program combining exercise with group work:  
Toward the development of an effective program for patients with diabetes mellitus ..... **Kyoko TAGAMI, et al.** • 67
- A Evaluative Research of the Effectiveness of the Voluntary Elder Ombudsman ..... **Jung-Don KWON, et al.** • 81
- The Characteristics of Children with Physical Disabilities and the Curriculum  
and Teaching Method for Them in the Special Needs Education ..... **Chang-Wan HAN, et al.** • 94
- Categorization of Consumption Expenditure and Analysis of the Factors  
Affecting It- For Households with Elderly Members who Participated in  
an Employment Promotion Project for the Elderly in 2011 - ..... **Gi-Min LEE, et al.** • 116
- Relationship between Stress-appraisals and Depression among the  
Institutionalized Elderly in Korea ..... **Jae-Jong BYUN** • 136
- Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special  
Needs Education and Stressor  
- From the Analysis of Mental Health Check for Teachers - ..... **Kohei MORI, et al.** • 144
- The current situation of schoolchildren that seems developmental  
disorders in general education ..... **Aiko KOHARA, et al.** • 156

### SHORT PAPERS

- Implications of Community-Based Human Service Program of South  
Korea in the Process of Establishing Health Support System  
for the Weak People for Disasters ..... **Keiko KITAGAWA, et al.** • 166
- A study on the development and the issue of the small-scale sheltered  
workshop for the persons with disabilities in Taiwan ..... **Chen Liting, et al.** • 176
- A comparative study on Quota System in Japanese and Korea ..... **Moon-Jung KIM, et al.** • 193